

中緯度森林の定住民

著者	西田 正規
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	10
号	3
ページ	603-613
発行年	1986-02-22
URL	http://doi.org/10.15021/00004394

中緯度森林の定住民

西 田 正 規*

Sedentary Life before Agriculture

Masaki NISHIDA

V. G. Childe asserted that food production was the basic conditioning factor for the emergence of sedentary way of life (Fig. 1). But this model is inapplicable to prehistoric Japan, where the Jomon Period was characterized by the sedentary small village society without intensive food production. That was a firm prehistoric stage between the nomadic Paleolithic life and the agricultural sedentary life of the Yayoi Period. There are many other well-known examples from a wide geographic range. Sedentary life without agriculture might not be exceptional among foraging societies inhabiting a particularly rich environment, but might be the general form in the middle latitude temperate forest before agriculture or civilization developed there (Fig. 3).

Whereas Childe's model might represent a diachronic expression of the common economic ethnographic classification *i.e.*, producer vs. forager (Fig. 4), I present a residential situation (*i.e.*, nomadic vs. sedentary) classification in this paper (Fig. 6).

1. 農耕以前の定住者
2. 生活様式の分類

日本列島における縄文時代の文化が狩猟採集民文化としても、農耕文化としても理解しにくい側面を持つことはこの時代の文化遺物に接してきた多くの人々が感じとってきた所であろう。縄文時代とほぼ時を合せて、ヨーロッパから西アジア、インド、中国にかけての各地に出現した農耕牧畜をとまなう新石器時代にたいし、農耕牧畜を

* 筑波大学, 国立民族学博物館研究協力者

発達させたとは言い難い縄文時代の文化は、いわば準新石器文化として、きわめてあいまいな位置しか与えられてこなかった。人類史的な視野からの位置付けを欠く縄文文化の研究が、膨大な発掘資料の蓄積にもかかわらず、ややもすれば日本列島における地域史としての視点しか持ちえないのも当然のことであろう。

しかし、新石器時代、あるいは新石器文化の概念も、ヨーロッパや西アジアにおける地域史をもとにして組み立てられたにすぎない。それがあたかも人類史的な時代区分、あるいは文化の区分であるかのように考えてきた所にも問題があるだろう。地域史を越え、遙かな高さから地球を見た時、後氷期中緯度森林環境に出現した新たな生活様式について、人類史の立場から位置付けを試みた。

1. 農耕以前の定住者

縄文時代の研究は稲作農耕がはじまる遙か以前の日本列島に、野生動植物の採集、漁撈、狩猟に大きく依存した定住的な村生活の存在を明らかにしてきた。農耕をほとんど、あるいは全くおこなわない定住民は、北米におけるカリフォルニアや北西海岸のインディアン、北海道のアイヌ、シベリアのウルチやナナイなどの民族においても知られており、彼らの物質文化や社会が、遊動生活を続ける狩猟採集民に比べてより高度に発達していることから、それらと区別して「高級狩猟採集民」、あるいは「成熟せる採集民」などと呼ばれてきた。意匠をこらした土器を焼き、漆を塗った弓や盆を作るなど、単なる機能を越えたところにも多大の労力を投下していた縄文時代の生活もこれと同じ範疇に入るものであろう。

ところで、人類が出現して以来、数百万年を狩猟採集民として生きてきたことは広く認められていることである。しかし、そこで狩猟採集民と言うとき、いま述べた高級狩猟採集民が示す生活様式はいかに位置付けられてきたであろうか。彼らについては、例外的に豊かな環境における例外的な狩猟採集民とみなすことがむしろ一般的であり[サーリンズ 1972: 6, 84]、またチャイルドの新石器時代革命(=食料生産革命)による定住生活の出現という図式以来、人類史の中にこのような生活様式を収める場所は

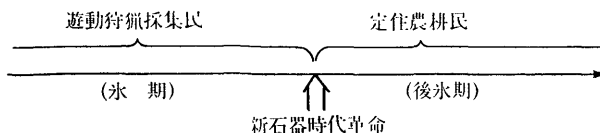


図1 新石器時代革命モデル

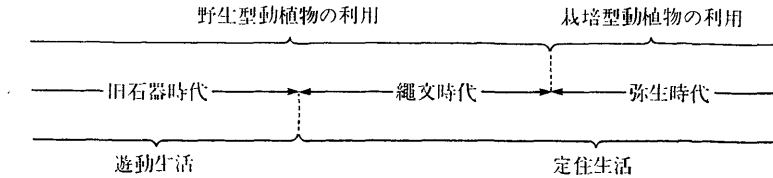


図2 日本における文化変遷

ほとんど用意されてこなかったのである（図1）。

彼らを特殊な狩猟採集民とみなすなら、おそらくそこで予想されている一般的な狩猟採集民は、ブッシュマンやピグミー、ハッザ、東南アジアのネグリート諸族、大盆地のショショニ・インディアンや極地のエスキモーなどのように、運べるだけのわずかな道具を持って遊動する狩猟採集民なのであろう。だが、遊動狩猟採集民の伝統は熱帯の森林や、半砂漠地帯、あるいは半年以上氷雪にとざされる寒帯など、農耕民や文明が長く侵入しなかった地域には今もなおその姿が見られるものの、後氷期に拡大した中緯度の温帯森林地帯にはその痕跡すら認めることもできない。

農耕や文明が世界に広く拡散したのは、後氷期以後のここ数千年のことであり、その中心地は西アジアや中国、インド、ヨーロッパなど、中緯度の森林地帯とその周辺地域にあった。当然のことながらそれ以前の中緯度森林地帯には農耕民や文明の進出によって今は姿を消した農耕以前の生活があったはずである。はたしてそれは、チャイルドの図式が求めるような遊動狩猟採集民であっただろうか。日本における縄文文化のあり方は、そのような図式が成立し難いことを示している。日本における生活様式の変遷過程は図2のように表わすことができる。

縄文時代の日本には、ヒョウタンやリョクトウ、アサ、エゴマ、シソ、ゴボウなどの外来の有用植物が持ち込まれたし、クリやクルミ、フキ、ワラビなど、明るい開けた場所を好む有用植物が集落の周辺に集中し、一部の地域では栽培への比重が大きかったことも予想される【鳥浜貝塚研究グループ(編) 1979, 1981, 1983, 1984; 西田 1980, 1981; NISHIDA 1983]。しかし、それでも縄文文化の経済は野生動植物の狩猟、採集、漁撈活動に大きく依存していたことも確かであり、栽培することが縄文文化の経済や社会の要の位置を占めていたとは思えない。

だが一方で、縄文時代には定住的な村生活がおこなわれた。この点については、栽培植物や家畜をともなった弥生時代以後の生活様式と共通しているものの、縄文以前の旧石器時代に予想される狩猟採集社会とは異質である。定住生活の始まりと、農耕を主要な社会経済基盤とした社会の成立との間には時代的ずれがあり、そこに狩猟採

集を主な経済基盤とした定住生活が続いたのである。

このようなありかたは日本においてだけの現象ではない。ヨーロッパにおいても、ムギ類やヤギ、ヒツジなどの栽培型植物や家畜が拡散する以前に、すでに中石器時代の定住的な生活があった [ROWLEY-CONWY 1983]。西アジアにおける中石器時代のナトゥーフ文化には、たとえば、ヨルダン溪谷のフーレー湖畔のアイン・マラッハ遺跡におけるように、大きな石臼と炉、貯蔵施設を持った石囲いの堅穴住居を作り、手のこんだ石製容器やネックレスなどの豊かな物質文化を持った定住的な生活があった [REDMAN 1978: 71-77]。西アジアに栽培植物や家畜が現われるのはこれより後のことである。

北米の中西部、東部海岸においても、トウモロコシの栽培が始まるよりもはるかに古く、たとえば、イリノイ河流域のコスター遺跡でみられたアーカイック期の定住生活が出現している [STRUEVER 1979: 131; TUCK 1978: 28-30]。カリフォルニアの海岸部では8000年から5000年前にかけて、それまでの狩猟民的生活から、多量の石皿や擦石を伴った木の実の採集に重点を置いた生活に移行し、さらにそれは、木の実や貝、魚類、獣など多様な食料資源に依存した定住生活に移行する [WALLACE 1978: 28]。世界の中緯度森林地帯の広い地域において、「中緯度森林の定住民」ともいうべき農耕以前の定住民が存在していたことになる。

農耕以前の中緯度森林地帯には遊動狩猟採集社会よりもむしろ定住社会が一般的であるのなら、「中緯度森林の定住民」は、例外的に豊かな環境における例外的な狩猟採集民などと言うべきものではなく、人類史におけるより一般的な生活様式の一つとして把握されなくてはならない。カリフォルニアや北西海岸のインディアンなどにみられた、野生動植物の採集、漁撈、狩猟による定住生活は、ただ最近にいたるまで農耕民化しなかったことにおいてのみ、例外的な中緯度森林の定住民ということになるのである。

中緯度の森林環境に定住民が出現する背景には、亜寒帯的なステップやパークランドにおける狩猟に重点を置いた旧石器時代の生活から、晩氷期以後の温暖化による温帯森林の中緯度地帯への拡大に対応して、魚類や、澱粉質の木の実や種子に依存を深め、漁網やヤナなどの携帯できない大型漁具や、食料の大量貯蔵が発達したことがあった [西田 1984]。初期の定住生活者の出現は地域によって多少の違いはあるものの、日本列島においても、ヨーロッパ、西アジア、北米の中西部とカリフォルニアにおいても、更新世終末期から完新世前半にかけての温暖化の時期に現われる。

これに対し、中緯度森林の定住民が栽培や家畜飼育を始め、あるいは農耕民や文明

の侵出によって消滅する時期は地域によって大きく異なっている。西アジアは最も早くに農耕化した地域であり、やや遅れてヨーロッパが、そして中国でも、農耕化は定住民出現後の比較的早い時期におこったのであろう。日本では縄文時代の終末期からその影響を受けるようであり、ほぼ同じ時期に、北米東海岸一帯にトウモロコシ栽培が拡散したようである。後々まで中緯度森林定住民の伝統が生き続けたのは、北海道から極東シベリアにかけての一帯と北米のカリフォルニア、北西海岸などのわずかな地域のみである。これらをふまえると、先程の図はさらに図3のようになるだろう。

世界の中緯度森林帯の大部分の地域における生活は、文明社会が周辺の民族について記録を残すよりもはるか以前にすでに農耕化していた。農耕以前の人類の生活様式は、熱帯と寒帯では今もその伝統を継ぐ生活が見られるのに対し、農耕や文明が早く拡散した中緯度森林ではより早く消滅したのである。そのために中緯度森林の定住民の存在は我々にかすかな記憶しか残さなかった。これが我々文明人をして、かつて広く存在した中緯度森林における定住民の人類史的な位置付けと正当な歴史的評価を阻んできたのではなかろうか。

新石器時代革命の図式からすれば、中緯度森林の定住民は例外的な狩猟採集民としなければならない。この例外的生活様式の背景に例外的に豊かな環境が予想されたのであるが、しかし、カリフォルニアや北西海岸、北海道が、他の中緯度森林地域に比較して特に食料資源の豊かな地であるといえるのだろうか。中緯度の温帯森林には、ブナ科のドングリ類やクリ、ヒシ、クルミ、ハシバミ、アーモンドなどの木の実や、ユリやヤマイモなどの根茎類があり、その周辺のやや乾燥した地域にはイネ科植物の種子がある。また降雨に恵まれて、多くの魚介類の住む川や湖、池、海があり、野山にはシカやカモシカ類、イノシシなどの獣がいる。

これら中緯度森林地帯に広くありふれた食料資源こそ、カリフォルニアや北西海岸

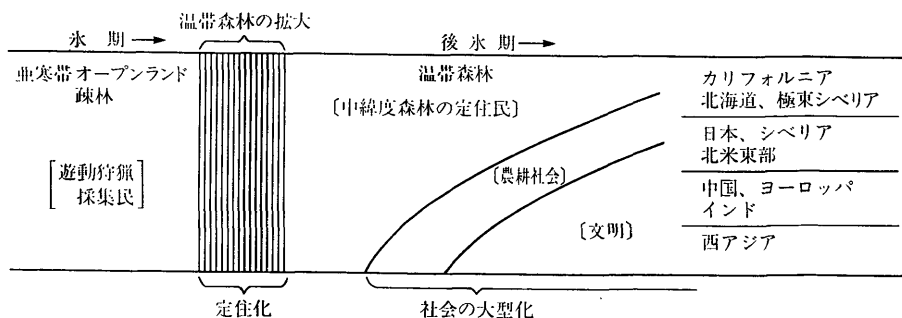


図3 中緯度森林定住民の分布

のインディアンやアイヌ、あるいは、縄文時代や西アジアのナトゥーフィアン、ヨーロッパの中石器時代、北米中西部のアーカイックなど、農耕以前の定住民の主要な食料資源であった。カリフォルニアや北西海岸が特に豊かな環境というなら、中緯度の森林地域はどこでも豊かであると言わねばなるまい。だがそれはむしろ中緯度森林環境の一般的な姿であろうし、北海道やカリフォルニア、北西海岸などの地域だけが特に豊かな環境であると言うべきものではなからう。

中緯度森林の環境を単なる豊かさによって特徴づけることに意味はない。中緯度森林の定住民の背景として重要な意味を持つのはむしろ環境の季節的特性であろう。ここでは木の実や種子、遡河性魚類が得られるものの、それが大量に得られるのは限られた季節のみであり、その他の季節、とくに冬期間は植物性食料を求めることはすこぶる困難である。食料資源量の季節的変動が大きい中緯度森林環境での生活は、そのために魚類や木の実、種子の豊かな時期にそれらを大量に保存して欠乏期に備えなければならない。中緯度森林環境は食料を大量に貯蔵する場合にのみ豊かな環境といえるのである。

食料資源を大量に貯蔵するには多忙な労働が強いられる。そのためにここでは作業効率を高める道具や装置の必要性が高い。アイヌが使用したヤナや、シカ柵と仕掛弓などの自動装置が、多忙であることの解消に重要な機能をはたしていたことについては、渡辺が強調してきたところであり [WATANABE 1964: 42]、また、効率的ではあるが携帯性を犠牲にしなければならない漁網やヤナなどの定置漁具の使用は中緯度森林の定住民に広く共通した現象である [西田 1984]。

食料の大量貯蔵や大型定置漁具を利用することと定住生活とが密接な関係にあることは明らかである。このような生計戦略を採用した農耕以前の定住民がユーラシアと北米の中緯度森林帯の広い地域にはほぼ同時期に出現することは、定住生活の出現とこの時期の環境変化との深いつながりを示すとともに、後氷期に拡大した温帯森林環境は、それ以前からの遊動生活を続けるには困難な環境であったものと考えねばならない。中緯度における定住生活の出現は、食料の大量貯蔵を要請する温帯森林環境の拡大ともなった文化的収斂現象とみなすことができる。

2. 生活様式の分類

中緯度森林の定住民の人類史的位置について述べたが、これに関連して、人類の生活様式をどのように分類するかという問題がある。中緯度森林の定住民は高級狩猟採

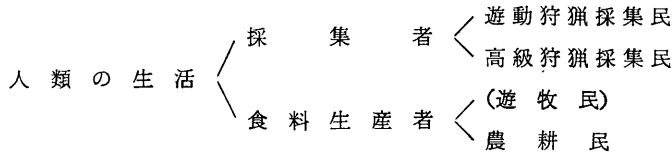


図4 新石器時代革命論と生活様式の種類

集民と呼ばれてきたが、この名称が示すように、そもそも彼らを遊動狩猟採集民とともに狩猟採集民として分類することに問題がありはしないか。

一般に、人類の生活様式は、食料を採集するか生産するか、あるいは野生型動植物を利用するか栽培型動植物を利用するかを基準にして、狩猟採集民と食料生産者とを区別し、その下位区分として狩猟採集民と高級狩猟採集民、あるいは農耕民と牧畜民などを分類する(図4)。新石器時代革命の歴史観が、生産様式によるこのような生活様式の種類体系と表裏の関係にあることは言うまでもない。

しかしながら、人類史的に見れば、森林の定住民は、遊動狩猟採集民と農耕民との中間に位置している。彼らは、主に野生動植物を利用することでは狩猟採集民との共通性を持ち、定住生活者ということでは農耕民に近い。したがって、これら三者を分類するとすれば、生産様式と生活様式の二つの側面のどちらをより重要な分類基準とするかについて議論がなければならない。

この問題について私の理解する所を図5に示した [西田 1984]。食料を大量に保存して定住生活を営むことについては、半年、一年、あるいはさらに遠い未来に対して今という時点から働きかける生活であることは強調しておくべきであろう。縄文時代の家屋や北西海岸インディアンの家屋は、十年やそれ以上も長く使用するために、大きな労力を投下して建てられるものであろうし、食料の大量貯蔵のためには、採集するにせよ栽培するにせよ、季節に追われる数カ月間の多忙な労働に耐えなければなら

	食料の大量貯蔵	長期的計画	集中的季節労働	大型定置漁具	永続的家屋	排泄物の処理	墓地の設置
遊動狩猟採集民	-	-	-	-	-	-	-
中緯度森林定住民	+	+	+	+	+	+	+
農耕民	+	+	+	+	+	+	+

+:アリ -:ナシ

図5 遊動民、定住民、農耕民の比較

ない。これらのことは、中緯度森林の定住民と農耕民に共通しているが、必要物資の欠乏や、災害、危険、不和、不安、汚染など、さまざまな不都合をキャンプ移動によって解消しようとする遊動民の生存戦略には原則的に無縁のものである [西田 1984]。

熱帯の遊動狩猟採集民はほとんど食料を蓄えない。明日も必ず食料が手に入ることが前提にあり、また、それを疑わない自然に対する全幅の信頼があるからであろう。煎本 [煎本 1983] は、カナダのタイガに住むインディアンが、食料も底をついた冬のキャンプで、トナカイの南下をただじっと待つ姿を描いたが、その根底にあるだろう自然によせる深い信頼感は、長期的な計画、努力、蓄えに頼って生きようとする定住生活者にはもはや持ちえないものではなかろうか。アイヌが、さまざまな複雑な儀式を通じ、神々との駆引きによって、未来の豊かな恵みの保証を得ようとしたことに、未来を計画し、多忙な労働に耐え、蓄える民の自然観の原点を見ることができよう。そしてまた、未来の制御を確信することこそ農耕を支える精神ではなかろうか。

中緯度森林帯における、遊動民から定住民、そして定住民から農耕民にいたる歴史的過程のどちらがより重要な意味を含んでいるのか。これらのことから私は、採集か農耕かということより遊動か定住かということの方が、より重大な意味を含んだ人類史的過程と考え、生産様式を重視する新石器時代革命 (=食料生産革命) に対して生活様式を重視する定住革命の視点を提唱した [西田 1984]。

同時に、中緯度森林の定住民を、栽培型植物を持たないこと、あるいは栽培の比重が小さいことによって狩猟採集民のカテゴリーに入れることは、我々の目を問題の本質からそらすものとする。彼らは、定住生活者であることによって、農耕民とともに定住民のカテゴリーに入れられるべきであろう (図6)。「高級狩猟採集民」、あるいは「成熟せる採集民」という名称でなく、中緯度森林の定住民としたのはそのためである。

中緯度森林の定住民と農耕民との関係が次の問題である。栽培型植物や家畜の有無は一つの判断基準である。しかし、ここでの目的は、人類の生活史の理解にあるのであって、食料資源としての動植物の形態的、遺伝的な性質自体に興味があるのでない。農耕化の現象が単に品種改良の問題であるなら、その過程の理解は育種学が専門とす

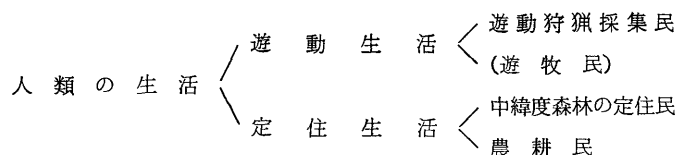


図6 定住革命論と生活様式の分類

る領域であろう。問題の本質は、栽培することがはたした人類史的な意味を問うことにある。

しかしそのように設問すると、その区別が実に困難であることを知ることになる。たとえばカリフォルニアや北西海岸インディアンは、素朴な農耕民よりもさらに高い人口密度を維持していたと推定されているし、しかも比較的高度な物質文化を維持し、また、その規模は低いとしても世襲される分業や身分の分化が見られる。これらのことは、農耕による高い生産力を背景にしてより高度に発達することはあったものの、しかしそれは程度の問題であり、農耕以前の定住民の段階ですでにそのような傾向性が準備されうると考えなくてはならない。

また一方、人類が植物の栽培や家畜の飼育を始めたとしても、それまでの採集や狩猟、漁撈活動がただちに放棄されたわけではない。弥生時代になっても縄文時代以来の生業活動の多くが続けられたし、西アジアの新石器時代でも野生動物の狩猟やピスタチョやアーモンドの採集が続いた。北米東海岸にトウモロコシ栽培が広がった後も、イロコイやアルゴンキンなどのインディアンは狩猟や漁撈、クルミやクリ、ドングリなどの採集を盛んにおこなっていた。畑の耕作は、彼らの生業活動の一部を占めたにすぎないのである。このような状況はヒエやアワを栽培したアイヌにおいても見られた。

さらにこの話を複雑にさせるのは、栽培型植物が栽培される以前に野生型植物の栽培ということがありうることである。カリフォルニアの定住インディアンは栽培しなかったとされているが、バウムホフは、彼らの救荒食であったトチの木がかつての集落跡に今もはえており、その種子は彼らが運搬したのであろうと述べている [BAUMHOFF 1978: 17]。トチの他にも彼らはさまざまな野生の有用植物を集落に持ち帰っただろうし、それらの植物の多くが彼らの集落の周辺に繁殖していた可能性はすこぶる高い。

縄文時代の遺跡からは高い頻度でクリの木炭が出土しており [千野 1983]、クリが集落の周辺に高い密度ではえていたことを示している。定住集落の周辺には、薪や建築材の伐採などによってクリやクルミ、ヤマイモ、フキ、ウド、イタドリ、キイチゴ類、サンショウなどが好んではえる開けた明るい場所がおのずと出現し、排泄物や食料残滓の廃棄によって土壌養分が蓄積し、そして人々はさまざまな植物を集落に持ち帰る。このような状況のもとで育成する植物は、たとえ野生型であったとしても、もはや単なる野生植物ではあるまいし、それを利用することは単なる採集でもない。定住集落の出現によって生じる有用人里植物と定住生活者のこのような共生的関係はすでに栽培への最初の重要なステップを踏みだしているのである [西田 1981; NISHIDA

1983]。

中緯度森林の定住民は、栽培へのステップを用意し、比較的高い物質文化や人口密度を維持し、萌芽的ではあるが世襲的な分業や社会階層を出現させることもある。また栽培が始まったとしても、それが社会経済に占める重要性にはさまざまな程度がありうる。こうしてみると、中緯度森林の定住民と、素朴な段階にある農耕民とがきわめて密接な関係にあることは明らかであり、それらは区別するより、むしろ連続した一連の傾向性の中で把握されるべき領域であろう。

したがってその間に、栽培、あるいは栽培型植物の有無によって人類史上の大きな画期を設定することも、両者がまるで異質な生活様式であるかのように分類することにも賛成できない。農耕が人類史においてはたした意味は、定住生活を生み出したことにはなく、中緯度森林の定住民の段階には見られないさらに高い人口密度や、より大きな集落や都市、より複雑な社会経済組織などの形成過程においてこそ評価されるべきであろう。すなわち、それ以前の素朴な社会にとどまっているなら、たとえ栽培型植物の栽培がおこなわれたとしても、中緯度森林の定住民の範囲内にあるものとして理解しておくべきである。

縄文時代の研究において、栽培や農耕にまつわる長い議論があるが、これをことさらに熱くしてきたのも、農耕の有無によって時代の評価を大きく変えなければならないとする歴史観のためであろう。しかし、縄文早期以来の漸進的な土器の変遷過程が明らかにされ、集落の規模や住居や石器、あるいはそれらから予想される社会や技術がこの時代を通じてある範囲内の高い同質性と連続性が明らかにされている縄文時代において、たとえ「農耕」を予想しうる栽培植物があったとしても、それによって縄文時代を、採集と農耕の、まるで異質な二つの時代に区分すべきとは思えない。すなわち、そのような歴史観に基づいた設問は、縄文時代や他のさまざまな中緯度森林の定住民の研究において、もはや大きな意味を持たないと考える。

謝 辞

この論文は国立民族学博物館における共同研究「北米大陸とユーラシアにおける狩猟民文化の比較研究」(代表者 小谷凱宣助教授)における議論の中から生まれました。御批判と助言と励ましを頂いた研究会の皆様と博物館に対し深く感謝いたします。

文 献

- BAUMHOFF, M.
1978 Environmental Background. In R. F. Heizer (ed.), *Handbook of North American Indians* 8 (California): 16-24, Washington D.C.: Smithsonian Institution.
- 千野裕道
1983 「縄文時代のクリと集落周辺植生」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』2: 25-42。
- 煎本 孝
1983 『カナダインディアンの世界から』福音館。
- 西田正規
1980 「縄文時代の食料資源と生業活動」『季刊人類学』11(3): 3-41。
1981 「縄文時代の人間-植物関係」『国立民族学博物館研究報告』6(2): 234-255。
1984 「定住革命」『季刊人類学』15(1): 3-27。
- NISHIDA, M.
1983 The Emergence of Food Production in Neolithic Japan. *Journal of Anthropological Archaeology* 2: 305-322.
- REDMAN, C.
1978 *The Rise of Civilization*. San Francisco: Freeman.
- ROWLEY-CONWY, P.
1983 Sedentary Hunters: the Ertebolle Example. In G. Bailey (ed.), *Hunter-Gatherer Economy in Prehistory*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 111-126.
- サーリンス, M. D.
1972 『部族民』青木保訳 鹿島出版会。
- STRUEVER, S.
1979 *Koster*. New York: Signet.
- 鳥浜貝塚研究グループ(編)
1979 『鳥浜貝塚 1』福井県教育委員会。
1981 『鳥浜貝塚 2』福井県教育委員会。
1983 『鳥浜貝塚 3』福井県教育委員会。
1984 『鳥浜貝塚 4』福井県教育委員会。
- TUCK, James A.
1978 Regional Cultural Development, 3000 to 300 B.C.. In B. G. Trigger (ed.), *Handbook of North American Indians* 15 (Northeast): 28-43, Washington D.C.: Smithsonian Institution.
- WALLACE, W.
1978 Post-Pleistocene Archeology, 9000 to 2000 B.C.. In R. F. Heizer (ed.), *Handbook of North American Indians* 8 (California): 25-36, Washington D.C.: Smithsonian Institution.
- WATANABE, H.
1964 The Ainu. *Journal of the Faculty of Science, University of Tokyo, Sec. 5, Vol. 2, Pt. 6*: 1-164.